

# 「山形仏壇」の技 継承

山形市十日町。大通りに面して「森谷大佛堂」の金色の文字が目に入る。仏壇仏具、みこし作りひと筋に200年余。山形錫物、置賜紬と共に国の伝統的工芸品指定を受けている山形仏壇をけん引する。今年5月には酒田まつりの神輿の復原・新調を請け負った。「職人が集積している仏壇産地を守り続けるためにも、常に責任ある仕事に挑戦していきたい」と語る森谷寛代表に伝統産業に掛ける思いをうかがった。

―酒田まつりで山形の伝統技術が披露されました

森谷氏 うれしかったですね。新たな担ぎ神輿の新調と、2基の神輿の復原・新調を一度に取り組むことができたのですから。これまで400基ほど製作に携わってきましたが、金具の細工や彫刻の技術、漆の塗装は最高クラスで「作る」というよりは「作らせていただいた」という思いでした。さすがに本間家3代当主本間光丘が250年前に京の職人に発注して北前船で運ばせ下日枝神社に奉納しただけのことがあります。「意匠や大きさを同じように作ってほしい」との依頼を受け、神輿を分解・掃除し1基当た

り3000個近い部品の寸法を1つ1つ測ったり、当時の文献を調べたりして、国指定伝統的工芸品「山形仏壇」の職人たちが、現代の技を駆使、精魂を込め作り上げました。

―山形仏壇の歴史をお聞きます。

森谷氏 約300年前、江戸時代中期の享保年間に遡ります。大曾根村生まれの星野吉兵衛が江戸浅草の工匠に師事して木彫を学び、帰郷して欄間(らんま)仏具の彫刻を生業(なりわい)としたのが始まりとされています。その後、家々に「持仏堂(仏壇)を祀るようになり、2代目吉兵衛が漆塗師、蒔絵師、金具職人などを統合して城下に工房を構えて、多くの門弟を養成し奥羽地方随一の仏壇産地を形成しました

私の家は江戸後期の文化年間(1804〜18年)に仏具の塗り職人だった初代が創業したと伝えられています。村山盆地は良質な漆の産地で、また、最上川舟運によって京阪地方から漆工芸の技法が入ってきたことから漆の塗師が数多くおり、当方も3代目までは塗師専門の職人として家業を守ってきました。

―山形仏壇の特長は分業制で、それぞれの職人が自分の仕事にこだわりを持っているということです。

森谷氏 自分の世界にこだわることで技術が磨かれてきたと言えるでしょう。分業化が確立し、量産体制が整ったのは明治時代に入ってからで、木地、宮殿(くうでん)、彫刻、金具、塗り、蒔絵、箔(はく)押し・仕組みと呼ばれる7つの工程からなり、当家の4代目がまとめ役となり、仏壇やみこしの製作を手掛けるようになりました。

5代目で私の祖父にあたる京介は仏壇職人の中心的な役割を担い、1911(明治44)年に設立された山形市佛壇組合(現・山形県佛壇商工業協同組合)の初代理事長に就任、全国各地に質の高い山形仏壇の普及に力を尽くし、戦前は満州にも仏壇を持って展示販売しましたが、仏壇組

―国の伝統的工芸品の認定条件の1つに技術者が集団で存在していることとあります。伝統産業は厳しい時代を迎えています。

森谷氏 人口減少や宗教離れなど確かに厳しい時代ですけれど、先人たちの教えを受け継ぎ乗り越えていかなければなりません。一度納めれば長い間、手を合わせてもらえるのが仏壇であり、崇められるのがみこしです。それを作らせてもらえる喜びを感じ続けたい。それには技術を磨き、伝えるとともに、業界が結束し新しい事への挑戦です。酒田まつりの神輿製作もその1つですが、山形市で開かれた東北六魂祭では伝統工芸御輿(みこし)を制作し、パレードの先陣を切りました。今月30日に開催される「まるごと山形まつりだワッショイ」にも登場し会場を盛り上げます。また、国、県、山形市の助成を得て、金山杉を使った付加価値の高い手作り仏壇を制作し販路開拓を行っています。

仏壇のみならず職人町で栄えた山形には錫物、打ち刃物、石工、建具など優れた伝統技術が残っています。安価な外国製品等に押されていますが、確かな手作りの良さは今後ますます見直されます。若い後継者たちも頑張っています。こうした伝統的工芸品、日用品を一堂に集め、情報提供・販売に結び付ける常設展示場をぜひ街なかに設けてほしいですね。



2014年5月、山形で開催された東北六魂祭でデビューした山形市伝統工芸御輿(みこし)。今年の山形花笠まつりにも登場。佐藤孝弘山形市長も担ぎ手となりパレードを大いに盛り上げた



## 森谷大佛堂

創業 1804〜18(文化年間)  
代表 森谷 寛(かん)氏=写真  
所在地 山形市十日町1-3-24  
☎023-623-0739



(写真右) 手押し式の霊柩車を納品。店舗前で撮影=昭和20〜30年代(写真左) 酒田市の下日枝神社の神輿を復原・新調した職人グループ

